

フォルトウナ号

1

U S T 歴（世界標準時間）、二〇〇年八月二十五日。

宇宙船『フォルトウナ号』は巡航高度に達すると銀色の両翼を大きく広げ、黄昏の空を大きく旋回した。

有翼の女神のように優美なフォルムと最新の恒星間航行システムを備えたフォルトウナ号は、M I G（マクダエル・インダストリアル・グループ）の創業者一族であるマクダエル家が代々所有するプライベートジェットだ。その推進装置には、宇宙文明の根幹をなす『ニムロイド合金』がふんだんに使われ、M I G の卓越した技術を象徴する。

銀色の機体には、苛烈な宇宙開発競争を生き抜いてきたマクダエル家の家訓『Fortes fortuna adiuvat（運は勇敢な

者たちを助ける）』と刻まれ、受難の戦士に福音を告げる。

だが、伸るか反るかは己次第。機会は与えても、勝利は約束せぬ。この世に幸運も不運もなく、運命はただ試すだけである。

そして今、フォルトウナ号を所有するのは、M I G インダストリアル社の最高経営責任者にして、稀代の事業家と名高いアル・マクダエルだ。

この五月で六十歳の誕生日を迎えたアルは、人懐こそうな黒い瞳が印象的な紳士だ。顔は丸く、眉は八の字に垂れ下がり、鼻はちんまりとして、タヌキのようにとぼけた風貌は厳しい交渉の場でも変わることはない。祖父ノア・マクダエルが興した特殊鋼メーカー『M I G インダストリアル社』を三十五歳の若さで受け継ぎ、五歳年上の姉ダナ・マクダエルと共にグループを率いてきた。その指導力もさることながら、企画、戦略、管理、実践、あらゆる面で卓越し、ぼんくらとした世襲社長のイメージとは程遠い。就任以来、一度も赤字を経験したことがなく、社内外に幅広

い人脈を持ち、ライバル企業でさえその手腕に一目置くほどだ。

二十年前には長年の研究開発の成果であるニムロイド新合金「^{ニムロイド}NM-1Nu」を市場に送り出し、MIGインダストリアル社を世界で五指に入る特殊鋼メーカーに押し上げた。今やMIGの関連企業は六十社を超え、その市場は宇宙植民地の隅々まで広がっている。

だが、アルにとって世間の賞賛は無意味だ。

その目は常に惑星アステリアの海に注がれている。

水深三〇〇メートルの深海底に堆積する海台クラスト。

そこに含まれる金属元素《ニムロディウム》こそ世界を変える。

^{ニムロイド}NM-1Nuの成功も、経営者としての名声も、全てはこれを採掘する為の手段に過ぎない。絶対不可能と言われた海底鉱物資源の採鉱を成し遂げて、初めてアルの人生も報われる。「悪をもて悪に報いず、凡ての人のまえに善からんことをはかり、汝らの為し得る限りつとめて凡ての人と相

和らげ。愛する者よ、自ら復讐すな。ただ神の怒りに任せまつれ。録して主いい給う、復讐するは我にあり、我これに報いん²」の言葉通りに。

二世紀前。Anno Domini（西暦）の末期。

みなみのうお座に向けて打ち上げられた無人惑星探査機パイシーズが、《ネンプロット》と呼ばれる赤茶けた惑星から一つの鉱石を持ち帰った。

程なく鶏卵ほどの赤い石から未知の金属元素《ニムロディウム》が検出され、これを鉄や銅などのコモンメタルに微量に添加すると、有害な宇宙線の遮蔽能力が格段に向上することが明らかになった。

それを皮切りに、ニムロディウムを用いた合金設計の技術も飛躍的に進歩し、それまで絶対不可能とされた恒星間航行の推進装置や高機能な宇宙構造物の建造が可能となった。

これを機に惑星ネンプロットの鉱物資源開発に乗り出したのが多国籍企業グループ『トリアド・ユニオン』だ。代表会議の場に幾つもの三色旗が並んだことから、当初は「トリコロール・ユニオン」と呼ばれていたが、出資者の増加に伴い、『トリアド・ユニオン』と名称を改めた。そのシンボルは、聖なる力とバランスを表す三叉矛^{トライデント}である。

トリアド・ユニオンの他にも様々な資本がネンプロット進出を目論んだが、トリアド・ユニオンに決定的な優位をもたらしたのが『ニムロデ鉱山』の発見だ。

ニムロデ鉱山は、惑星ネンプロットの赤道直下に広がる二六〇万平方キロメートルにも及ぶ巨大な単体火山だ。地下深くにはニムロディウムの含有率三〇パーセントを超えるニムロイド鉱石の大鉱床が広がり、その商業的価値は計り知れない。だが、採掘は困難を極め、あまたの業者が、つるはしを折る中、アダマント³のような岩盤を掘り抜いて、これをいち早く手中に収めたのが、トリアド・ユニオン傘下の鉱山会社『ファルコン・マイニング社』だ。

当時、宇宙開発には幾多の問題が横たわっていた。その最たるものが、旧時代に制定された宇宙開発法「宇宙の領土はいかなる国家にも属さない」という規約である。この曖昧さゆえに、宇宙開発の主導権は「国」ではなく、巨大な多国籍資本が掌握していた。かつて宇宙船の船体には国家の偉業を称えて国旗が描かれたものだが、新時代の宇宙船には出資した企業のロゴがずらりと並んでいる。

そんな中、中堅の鉱山会社に過ぎなかったファルコン・マイニング社が、いち早くニムロデ鉱山の鉱業権を手に入れたのも、宇宙鉱業法が整備される以前の『先願主義』の賜だ。ファルコン・マイニング社は、宇宙文明の根幹をなすニムロディウム市場を瞬く間に独占し、採掘から販売まで一手にし、「ファルコン・マイニング社の採掘機が止まれば宇宙船も飛ばない」と言われるまでになった。

更に系列会社であるファルコン・スチール社がニムロディウムの製錬法を確立し、優れた強度や耐久性を備えたニムロイド合金の大量生産が可能になると、宇宙航空、建設、

恒星間通信など、宇宙文明を支える技術が飛躍的に向上し、宇宙植民時代が幕が開けた。

これを機にU S T歴ユニヴァーサル・スタンダードタイム（世界標準時間）が導入され、人類は宇宙に向かって爆発的に領土を広げたのである。

2

今、アルの眼下には、繁栄を極める《惑星トリヴィア》の工業地帯が銀のパノラマのように広がっている。

直線距離にして約二〇〇キロメートルに及ぶ広大なベルト地帯には、最新式のエコシステムを取り入れた製鉄所や化学プラント、組み立て工場やバイオファクトリーが立ち並び、世界中に工業製品や半製品を送り出している。

《トリヴィア》は、ネンブロット開発に伴って開けた、世界最大の宇宙植民地だ。政治的には self-governing colony（自治領）に区分され、二院制からなる高度な自治を行っ

ている。

みなみのうお座星域を表す《P A S第6恒星系》の第3軌道を周回し、直径は約一万キロメートル。都市部の大半は東半球の中緯度に集中し、地熱ジェネレーターが作動する総面積約二万平方キロメートルの領内に八〇〇〇万人が暮らしている。

大気の安定した岩石型惑星で、多くの宇宙航路が行き交う利便を活かし、U S T歴元年、貿易中継基地として開かれた。名前の由来はラテン語の『三叉路』だが、暗に開発を主導したトリアド・ユニオンを指しているとの見方もある。

開発当初は、輸送、修理、補給、宿泊といったサービス業が中心だったが、産業基盤の整備が進み、オフィスや工場が次々に建設されると、世界の工業基地としての役割を一手に担うようになった。以後、一世紀半にわたり、優れた工業原料や製品を輸出し、今では《ステラマリス》と呼ばれる人類の母星を遙かに凌駕する生産力を誇っている。

M I G の前進である『マクダエル特殊鋼』がファルコン・スチール社と提携してトリヴィアに進出したのは U S T 歴四〇年代だ。

元々は合金設計を得意とする中堅の特殊鋼メーカーだったが、卓越した技術を見込まれ、ファルコン・スチール社と共同でニムロイド合金の製造に乗り出した。ファルコン・スチール社が高品質なニムロイド合金の大量生産を可能にしたのも、マクダエル特殊鋼の高度な技術ゆえである。

U S T 歴九〇年、トリヴィアが自治権を獲得し、同じ《P A S 第6恒星系》の第4軌道を周回する惑星ネンプロットが『^{テリトリー}属領』として取り込まれると、ファルコン・マイニング社は政財界の中枢にいつそう深く入り込み、鉱業行政のみならず、経済政策、外交、広報、労働問題や福祉に到るまで隠然たる影響力を持つようになった。その結果、ニムロディウムはもちろん、その他の金属資源までもがファルコン・マイニング社を頂点とする企業連合の支配下における、価格、販売、生産量、輸送経路に至るまで、独占的に

取り仕切られるようになった。

わけても世界に多大な影響を及ぼしているのは、ハイテク産業の要ともいべきレアメタル（希少金属）だ。

レアメタルは、鉄、銅、亜鉛といったコモンメタルに微量に添加することで、耐熱性、耐食性、高張力といった金属性能を高め、新素材や技術開発の鍵となる重要な物質である。だが、「産出する場所がきわめて限定されている」「純金のように元々の埋蔵量が少ない」「純度の高い金属成分の抽出が非常に難しく、複雑な精錬プロセスを必要とする」といった理由から生産者も製造量も限定され、その安定供給には常に政治的、経済的問題がつきまとう。

とりわけ良質なニムロディウムはファルコン・マイニング社に抑えられ、生産も市場価格も彼らの意のままだ。トリヴィア政府も鉱業局の権限を強化し、ファルコン・マイニング社の寡占に対抗したが、鉱業局の幹部までもが収賄に手を染め、業界の浄化には至らない。

価値観の違いからファルコン・スチール社と袂を分かち、

独自路線を歩み始めたマクダエル特殊鋼も、ファルコン・マイニング社に幾度となく原料の供給を止められたり、一方的に原価を吊り上げられたり、お預けを食らう犬のように翻弄されてきた。

かといってニムロディウムの採掘には地下深く掘削するノウハウが必要であり、何の実績もない企業が真似できるほど容易くもない。誰もがファルコン・マイニング社に強い不満を抱きながらも、正面から「NO」を突きつけることができないのは、彼らが図体だけでなく、世界屈指の採掘技術と開発力を誇っているからだ。

そんな中、U S T 歴九十二年から九十三年にかけて、ファルコン・マイニング社の劣悪な労働環境に反発し、労働組合が鉱山、製錬所、宇宙港などで大規模なデモとストライキを決行した。この運動は長期化した上に、暴徒がネンブロットの倉庫や鉄道を襲撃して、配送システムをダウンさせ、ニムロディウムのみならず、他の金属資源の生産や輸送にまで著しい支障をきたした。

その後、労働者の賃上げや福利の向上、鉱業法の見直しや監督機関の強化といった抜本的な対策により、とりあえず事態は沈静化した。が、ファルコン・マイニング社の一党支配は依然として変わらない。

ネンブロットに依存する政治経済の基盤の脆さを改めて認識したトリヴィア政府は、九十三年半ばより自主探鉱政策の一環として惑星探査を開始し、九十五年、PAS 第9 恒星系の第3 軌道にテラフォーミング可能な惑星を発見した。惑星表面積の九十七パーセントが海洋で覆われた水の惑星だ。この海洋惑星は、ギリシャ語で『星の島』を意味する《アステリア》と名付けられ、人工衛星と無人機による精査が開始された。

海水にはニムロディウムをはじめ、マンガン、コバルト、ニッケル、リチウム、ウラン、金、銀、レニウムなど、様々な金属元素が溶け込み、海底の泥や岩石にも大量に堆積していたが、それを採掘するのは決して容易ではない。

理由の一つは、海洋に関する知識、技術、人材の圧倒的

な不足である。

ニムロディウムの実用化により、人類は爆発的な勢いで宇宙に進出し、宇宙開発に必要な科学技術は著しく発達したが、海は置き去りにされた。金属容器も押し潰す深海の超高圧、どれほど強力なライトを用いても視界十メートル程しか照らせない絶対的な闇、電気も電波も届かない水の世界が技術の前に立ちほだかり、研究は遅々として進まない。海底地形を調べるにも数十名の乗組員を集め、調査船を出し、水中機器のオペレーターや整備士、音響測深や音波探査のエキスパートなどを総動員せねばならず、同じ一平方キロメートルを調べるにも、地上の鉱山と海底では掛かる経費も手間も桁違いである。

また、ステラマリスでは深刻な海洋環境の破壊によって自然保護が強く叫ばれ、産業界がより実益をもたらす宇宙開発にベクトルを向けた理由も大きい。海洋科学に投入される予算も、学問自体も縮小し、水中音響学、船舶工学などの特殊技能を有する人材まで激減した。

それに加えて、商業的に採算の取れる海底鉱物資源の採掘システムは未だ確立されていない。

古来より、海に眠る未曾有の鉱物資源を得ようと国や企業がこぞって研究に取り組んできたが、水深数千メートルの海底鉱物資源を効率よく回収する技術は困難を極めた。

まず正確な埋蔵量を把握する海洋探査が陸の鉱物探査に比べて非常にハードルが高く、一つの海域を調べるだけでも莫大な予算と手間を必要とする。地上の鉱山であれば、観測衛星や無人飛行機を使って地上の様子をつぶさに観察できるが、超高圧と暗闇に閉ざされた深海では海底地形の把握からして困難だ。探査に必要な水中機材の開発費だけでも馬鹿ならず、それを支える人材も年々減少している。Anno Domini (西暦) の後期には幾通りかの採鉱システムアンノドミニも考案され、プロトタイプによる試験採掘も行われたが、安全で効率的な手法を確立するには至らなかった。

また採取した海底鉱物や堆積物から商業的価値のある金属成分を抽出・加工する技術も未完成であり、どれほど埋

蔵量が膨大でも、陸上の鉱山業を凌ぐ経済効率を達成できなければ、海底資源の有用性はきわめて低いと言わざるを得ない。

結局、海底鉱物資源の採鉱に必要な何十億もの初期投資と、その維持管理に必要な経費を考慮すれば、ネンブロットをはじめとする資源供給地との外交を重視し、技術協力や資金援助を通じて間接的な採鉱政策をとる方がより現実的との判断から、トリヴィア政府はアステリアの海洋開発を断念した。

そして、発見から一世紀以上が経った今も、未曾有の海底鉱物資源は誰の手に渡ることなく、深く静かに眠り続けている。

もし、それを掘り起こせる人間がいるとしたら、アル・マクダエルをおいて他になかった。